

アメリカ文学を原書で読む

金谷良夫

1. 英語と文学の重要性

英語を学習するうえで、2012年においてわが国の風潮として見ると、文学はどちらかと言えば軽視される傾向がある。その大きな理由の一つはかつて文学偏重と言われた時代が続いていて、その結果実用的な英語を駆使できない学生や社会人が多かったと思われたからである。だからといって文学を通して英語力とコミュニケーション力を磨けないはずはないのである。否、むしろ文学作品を通して英語の持つ魅力やその深さ、そして物語の内容の魅力や深さを理解できるのである。トーフル、トイック、英検などの資格試験、学習参考書、英会話のハウツー書あるいは時事英語などを通してのみ、英語学習を試みようとするとはある意味では無味乾燥な内容に辟易してしまう可能性があるのではないか。もちろんそうした学習教材を否定しているのではない。そうしたさまざまな教材となるものを組み合わせながら文学作品を読み英語力やコミュニケーション力を伸ばすことを勧めたいのだ。本稿においては、アメリカ文学作品のなかから具体的に優れた作品を選び、原書の持つ意味の深い内容を味わうことによって、より豊かな、意味のある内容を表現できる能力を身につけるといえることが極めて重要であるということを主張したいのである。

さらに、近年学生の「読書離れ」が叫ばれるようになってきているため、ここで学生の原点に戻って読書を通して読解力を養う習慣を築く意味で文学を読んでもらいたいのである。たとえどんなに電子書籍端末などの機器が発達しても元々本を読む習慣のない人は、それを利用したからと言って読書をするのではないと言ってよい。いろいろな文学作品をできる限り渉猟してほしい。文学が社会に対して果たす役割と及ぼす影響力は依然として少なくないからである。逆に言えば、文学のない社会は味気ないだろう。

21世紀が英語の世紀であることは疑いを入れない。またグローバル化した現状において英語を学習せずして、ビジネス界でリーダーシップをとることは難しいばかりか、会社の内外でビジネスを行うこともできないかもしれないのだ。最初に、大学においてはできる限り英語を重要な科目として多く選択し、履修するなかで英語の重要性や英語学習の目標を定めて学習に勤しむことが先決である。その目標の対象は試験対策、就職、留学、旅行、読書というように何であってもよい。そし

て重要なことは、英語は単なる道具であり、自分が表現したい豊かな内容があることである。今日求められる英語の力とは、あらゆる状況でそうした自分を豊かに表現できる英語力である。文学において、理想は外国の作品自体を直接原語で読めることだが、それは不可能であるため少なくとも英語は原語で読みたいものである。文学を通して英語力やコミュニケーション力を強化するという目的は、上記の教材全てを通して強化する目的と軌を一にする。文学は、人生哲学と言え、人間の精神活動であり、解答のない問題解決能力を育むことにおいて大いに有益である。たとえば、作品に描かれた人生における冒険を参考にし、それを自分の意義ある人生へと変えていくことも可能である。加えて、文学作品を堪能できれば読者は代償体験も可能である。だから文学作品の持つ魅力を味わうことは有意義だし、精神的にも満ち足りてくるのである。それを英語で書かれた作品を原語で読めれば読めるほど、ますます英語力もつくし、ますます楽しくなるのである。

2. アメリカ文学の魅力とマーク・トウェイン

アメリカは、歴史の浅い国であるが、こと科学文明に限れば1870年代に最強の産業国になるという最も古い国である一方、世界への影響力の見地からは最も強い国であり、多民族国家としても最も大きな国である。文学においてはどうか。アメリカ文学は当初イギリス文学のなかのごく一部でしかなかったのである。当初はおそらくアメリカ語ということさえ注目されなかっただろう。アメリカ文学は文化的にも、言語的にもイギリスおよびヨーロッパ文学の範疇に入っていたと見られる。したがってアメリカ文学が確立したのは、20世紀に入ってからである。それは科学的にも、政治的にも、そして経済的にもアメリカが世界最大の国として国民の意識が高まってからである。今でこそ、アメリカ文学として名高い東部出身の、ラルフ・ウォルドー・エマソン、ヘンリー・デイビッド・ソロー、ハーマン・メルビル、ナサニエル・ホーソン、エドガー・アラン・ポウ、ウォルト・ホイットマン、ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー、ハリエット・ピーチャー・ストウ、ルイザ・メイ・オールコット、エミリー・ディキンソンなどはその文学の規範をイギリスに置き、イギリスやヨーロッパの文学の一環として扱われ、アメリカ独自の文学とは異なっていたのである。

ところが、19世紀にアメリカ西部で生まれ育った人間としての視点を持ち、アメリカ西部独自のアメリカ性を語ったマーク・トウェインが登場したのである。当初彼は大衆作家やユーモア作家としか見做されなかったが、アメリカが独立してから1世紀を経た1876年に、トウェインは初めて『トム・ソーヤーの冒険』という小説を世に出した。出版当初、この小説は一部の敬虔な宗教家や道徳家の響感をかかったが、現在に至るまでに数十か国の言語に翻訳され、何百万冊という部数が日の目を見るアメリカ文学を代表する大ベストセラーになっている。この作品にも見られるように、アメリカ文学の魅力は、たとえば(1)粗野ではあるがヨーロッパの伝統やしきたりに囚われることのない本質的に無垢で穢れのない少年が冒険を通して成長していく過程、(2)アメリカの夢を挑戦する過程、(3)伝統ではなくモラルを重視するという特色が描かれることである。つまりア

アメリカ文学はヨーロッパ文学から独立した魅力的な新しい文学である。

現在、学生の「読書離れ」に伴って「文学離れ」の現象も起きていることは否定できない。それは一つにはわが国の大学において文学を重要視しなくなったからである。その結果学生はたとえば、小説を読まなくなってしまったのである。その反動として、同時に文章の読み書き能力が大いに低下してしまっている。日本語の読み書き能力が低下することは、いわんや英語においてもそれは低下しているのである。たとえば、マーク・トウェインはアメリカを代表する作家でありながら、大学の教室で学生にマーク・トウェインを知っているかという質問に対し、20年ほど前は「知っている」と答えた学生は半分を優に超えていたが、現在ではほとんどがその存在さえ知らないのである。では、トム・ソーヤーはどうかと言えば、3割くらいの学生は知っていると答えるが、その作品を読む学生は極めて少ないのが現状である。有名な某テーマパークにあるトム・ソーヤーの存在、そして30年以上前から現在まで断続的にテレビで脚色されたアニメ番組『トム・ソーヤー』を放映している、という理由からその知名度があるからだろう。しかし、それほど知られていても、現状は原語で作品を読もうとする学生はそれほどいないのではないか。ぜひとも本学部の学生には小説を繙いてもらいたい。マーク・トウェインを読破したいなら、37巻の全集がある。ちなみにわが国において、「日本マーク・トウェイン協会」という学会があるが、その会員数は学生を含め100である。

先に述べたようにアメリカ文学を確立することに多大な貢献をしたトウェインであるが、アーネスト・ヘミングウェイは、『アフリカの緑の丘』において、すべてのアメリカ文学はトウェインの小説『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885年に出版された『トム・ソーヤーの冒険』の続編)という一冊に由来すると述べている。また、同世代の作家ウィリアム・デーン・ハウルズはトウェインをアメリカ文学のリンカーンであると述べている。そのほかトウェインの影響を受けたアメリカの作家には、シュアウッド・アンダーソン、ウィリアム・フォークナー、J.D.サリンジャー、ソール・ベロー、バーナード・マラマッドなど多数挙げられる。

マーク・トウェインとはサミュエル・クレメンズのペンネームである。マーク・トウェインとは水先案内の用語で水深2尋を表し、二尋あれば船が座礁せず安全に航行出来るという意味である。ハレー彗星が出現した1835年にアメリカ南西部のミズーリ州の寒村フロリダで生まれ、4歳でミシシッピ川河岸の町ハンニバルで育ち、中西部、西部へと移り最終的には東部でその生涯を閉じたのである。それは再びハレー彗星があらわれた1910年のことだった。その間、父親に早く死なれ、学校教育を十分受けずに印刷工として一家を支えることを手伝わされる。彼は、南北戦争に参戦したり、一攫千金を夢見たり、何度もヨーロッパへ旅行したり、移り住んだり、また事業に失敗して世界一周の講演ツアーに出たり、わが子に先立たれたりと波瀾に富んだ人生を送るのである。

彼は『トム・ソーヤーの冒険』を執筆していた頃、アメリカで最も人気のある国民的作家だったのである。彼は、生業として、代表的なものが作家であるが、印刷工見習い、印刷工、蒸気船の水先案内見習い、水先案内、兵士、工夫、新聞記者、講演者などを経験し、正にトウェインは波瀾万丈の生活を送ったのである。2010年に『マーク・トウェインの自伝』が出版され、その売り上げ部

数は50万部になっている。それは今でもマーク・トウェインがアメリカ人気作家であることを物語るのである。

3. 『トム・ソーヤーの冒険』を読む

さて、ここで参考として本作品をストーリーを中心に読解してみよう。わが国において、マーク・トウェインの作品のなかで最も知られている作品とは彼の最高傑作の『ハックルベリ・フィンの冒険』ではなく、『トム・ソーヤーの冒険』であろう。その理由は先に触れた理由に加え、本作品があまりにも児童小説として捉えられてしまったからである。また、現在でもその翻訳書はさまざまあり、また近く有名翻訳家が新版の出版を予定しているようだ。

『トム・ソーヤーの冒険』は、トウェインの自伝的要素がとりわけ強い作品である。小説の舞台は1840年代のハンニバルをモデルとしたセントピーターズバーグであり、それは牧歌的な村だが、その自然は激しく必ずしも優しくはなく、むしろ時にはそこで生きる人間に対して暴力的である。登場人物も当時実在した人たちを元に描かれている。作者はその「はしがき」においてそこで起きた事件のほとんどが実際にあったことだと書いている。また、本小説は主に少年や少女のために書かれてはいるものの、大人にもかつての自分と自分たちの変な企てを楽しく思い出しながら読んでほしいとトウェインは記している。彼は登場人物のハック・フィンとトム・ソーヤーは実在の人物から、そしてトム・ソーヤーは知り合いの少年3人を混ぜ合わせた人物として描いたと言う。

1) 原文の豊かさ

その原文による「はしがき」を見てみよう。

MOST OF the adventures recorded in this book really occurred; one or two were experiences of my own, the rest those of boys who were schoolmates of mine. Huck Finn is drawn from life; Tom Sawyer also, but not from an individual—he is a combination of the characteristics of three boys whom I knew, and therefore belongs to the composite order of architecture.

The old superstitions touched upon were all prevalent among children and slaves in the West at the period of this story—that is to say, forty or forty years ago.

Although my book is intended mainly for the entertainment of boys and girls, I hope it will not be shunned by men and women on that account, for part of my plans has been to try to pleasantly remind adults of what they once were themselves, and of how they felt and thought and talked, and what queer enterprises they sometimes engaged in.

ストーリーは、第3人称の語り手によって語られている。上記の原文を見ると、文章は多少長めだが読みやすい文体である。この作品は老若男女が楽しめる稀なストーリーだ。読者には音読を繰り返して原文に馴染んで欲しい。若い学生にとっては、音読だけで多大な効果を生むからである。

登場人物をここで確認すると、主人公はトム・ソーヤー(トーマス・ソーヤー)で、彼には母親も父親もいないが、叔母に育てられている。その友人ハック・フィン(ハックルベリ・フィン)には父親はいるが、子育てを放棄した存在で、住む家もなく大樽や軒下で寝泊りする浮浪児である。後に彼はトムの親友となる。ポリー叔母さんはトムの母親代わりで優しく信心深いやや年を重ねた婦人だ。シッド(シドニー)はトムと異母兄弟で、メアリーはトムのいとこで心やさしい。ジョー・ハーパーは町の尊敬される少年のなかでトムの親友だ。ベッキー・サッチャーは小説のヒロインでトムが好きになる相手である。ミスター・ドビンズは教室が一つしかない学校の校長先生だ。サッチャー判事はベッキーの父親で村の有力者だ。エイミ・ローレンスはトムの初恋の相手である。ダグラス未亡人はカーデイフ丘の大邸宅に住む優しく魅力的で裕福な人物でハックに好意的に接している。一方、悪人としては、殺人鬼インジャン・ジョーがいる。マフ・ポッターは死体窃盗を行うが騙されやすく弱い性格を持ち、インジャン・ジョーから殺人の嫌疑をかけられる。最後に集団として村人たちもいる。こうしたもろもろの人物がセントピーターズバーグという村においてピラミッド形を構成しているのである。

原文によるトムの性格描写は次のように記されている。

He was not a Model Boy of the village. He knew the model boy very well though— and loathed him.

トムは、自分は模範少年ではないだけでなく模範少年のことは良く知っていたし、模範少年をひどく嫌っているのである。さらに、トムの性格を表す描写として彼がベッキーを好きになる瞬間を見てみよう。

As he was passing by the house where Jeff Thatcher lived, he saw a new girl in the garden— a lovely little blue-eyed creature with yellow hair plaited into two long tails, white summer frock and embroidered pantalettes [sic]. The fresh-crowned hero fell without firing a shot. A certain Amy Lawrence vanished out of his heart and left not even a memory of herself behind. He had thought he loved her to distraction, he had regarded his passion as adoration; and behold it was only a poor little evanescent partiality. He had been months winning her; she had confessed hardly a week ago; he had been the happiest and the proudest boy in the world only seven short days, and here, in one instant of time she had gone out of his heart like a casual stranger whose visit is done.

トムはベッキーに出会うまで、世界中で誰より幸せだと感じていたエイミ・ローレンスとの恋愛が、ベッキーに会うと一瞬にして心変わりして、それまでの感情を覆すというように彼の移り気な性格がユーモアを交えて語られている。このように豹変するというギャップによって読者は笑いに

誘われる。原語に触れるとそのニュアンスが如実に伝わってくるのである。

次に、物語の背景と文体に着目しよう。物語の舞台はセントピーターズバーグという村における少年時代の世界である。いたずらは少年たちの世界の一部である。また、少年のささいな行動がその村の社会を露呈する。文体はややインフォーマルであり、ときに西部というお国言葉を盛り込んでいる。また、語り手は物語をリアリスティックに語っている。

物語は、「はしがき」および「おわりに」を除き35章から成る。小説の内容は大きく分けて、5つの構成で語られる。第一に、トムとその家族、学校そして教会における出来事が述べられる。次は、トムとベッキーとの恋愛物語である。第三は、トム、ハック、ジョー・ハーパーたちがジャクソン島で海賊ごっこする1週間が描かれている。第四は、インジャン・ジョーが真犯人にもかかわらず、その疑いをかけられるマフ・ポッターの裁判である。最後は、トムとハックの宝探しの冒険だ。こうした5つの出来事がほどよく構成されており、そのことがマーク・トウェインの小説のなかで最もまとまりのある物語と言われる所以である。

2) ストーリーの構成

それぞれ原文を引用しつつそうした5つの筋を追っていきこう。まずトムとポリー叔母さんとのやり取りを見てみたい。

Tom did play hooky, and he had a very good time. He got back home barely in season to help Jim, the small colored boy, saw next day's wood and split the kindlings, before supper—at least he was there in time to tell his adventures to Jim while Jim did three-fourths of the work. Tom's younger brother, (or rather, half brother) Sid, was already through with his part of the work (picking up chips,) for he was a quiet boy and had no adventurous, trouble some ways. While Tom was eating supper, and stealing sugar as opportunity offered, aunt Polly asked him questions that were full of guile, and very deep—for she wanted to trap him into damaging revelations.

このようにさぼり癖、冒険心、要領のよさ、あるいはいたずらからトムの自由奔放さが読み取れる一方、シッドは対照的に描かれている。ポリー叔母さんとのやり取りも理解できる。次に有名な白い漆喰塗りの場面が描かれるが、自分に課せられたこの仕事を友達には逆に面白い遊びと思わせ結局やらせてしまう。トムはそれについて遊びと仕事との定義を発見するのである。原文を見てみよう。ここにも笑いが見出せる。

He had discovered a great law of human action, without knowing it—namely, that in order to make a man or boy covet a thing, it is only necessary to make the thing difficult to attain. If he had been a great and wise philosopher, like the writer of this book, he would now have comprehended that Work consists of whatever a body is obliged to do and that Play consists of whatever a body is not obliged to do.

まさにそれは納得の行く定義づけだろう。次に教会の様子を考えよう。退屈な教会の説教に飽きるのは、トムだけではなく、村人たちも同様である。教会内で一匹の犬がピンチバック(カブトムシ)と戯れているのを見る会衆全体の反応である。

By this time the whole church was red-faced and suffocating with suppressed laughter, and the sermon had come to a dead-still. The discourse was resumed presently, but it went lame and halting, all possibility of impressiveness being at an end; for even the gravest sentiments were constantly being received with a smothered burst of unholy mirth, under cover of some remote pew-back, as if the poor person had said a rarely facetious thing. It was a genuine relief to the whole congregation when the ordeal was over and the benediction pronounced.

トムとベッキーの話はトムがベッキーに対し恋に落ちることから始まり、彼は彼女に愛を告白し、大人になったら道化になると言ったあと、ベッキーも彼に対して愛の告白をする。この両者の関係は物語の中で重要な役割を果たしており、それは少年と少女との恋がストーリーに物語にほのぼのとした印象や明るさを添えているからである。トムは、ベッキーが学校で解剖学の本のページを破いてしまい鞭打ちを受けるべき時進んで自ら彼女の身代わりにもなり、ベッキーにとってもトムは英雄になる。少年と少女のほのぼのとした情愛は古くて新しい一アメリカンヒーローシーンを印象付ける。トムはベッキーに "Tom, how could you be so noble!" と言われ二人の関係はさらに充実する道へと導いていく。トムとベッキーは他の人たちとピクニックに行きトムの冒険心から殺人犯のインジャン・ジョーのいる洞窟へ入り迷ってしまう。そのときの原文の対話である。

"Tom, I am hungry!" Tom took something out of his pocket.

"Do you remember this?" said he. Becky almost smiled.

"It's our wedding cake, Tom."

"Yes-I wish it was as big as a barrel, for it's all we've got."

"I saved it from the pic-nic for us to dream on, Tom, the way grown-up people do with wedding cake—but it'll be our—"

このように幼い二人の淡い恋が不安のなかにある二人に希望をもらすのである。

第三に、トム、ジョー・ハーパー、そしてハックのジャクソン島における冒険がストーリーを支える一本の柱になっている。少年3人は海賊を装って冒険を企てる。海賊としてのトムは次のように描かれる。

…Tom Sawyer the Pirate looked around upon the envying juveniles about him and confessed in his heart that this was the proudest moment of his life.

この島における自然は凄まじい。アメリカで捉えられる自然は激しく暴力的である。ここでの嵐の猛威は「バトル」として捉えられている。

Now the battle was at its highest…Every little while some giant tree yielded the fight and fell crashing through younger growth; and the unflagging thunder-peals came now in ear-splitting explosive bursts, keen and unspeakably appalling.

この例は、アメリカ文学の一つの特徴として捉えられる文明対自然というテーマに通ずるのである。3人の少年は村では死んだものとして決め付けられ葬式の段取りまで進む。それくらい猛烈な自然を村人たちは自覚しているのである。だが、トムたちは生き抜き結局英雄として戻るのだ。ヒーローになったトムは栄光のために生きられるだろう、と語り手はトムの性格を描写する。

第四として、トムとハックは、金銭目当てで悪事を働くインジャン・ジョー、マフ・ポッター、そしてロビンソン医師と現場で遭遇し、インジャン・ジョーによるロビンソン医師の殺人を目撃してしまうが、インジャン・ジョーは酔ったマフ・ポッターに濡れ衣を着せる。トムとハックとは殺人現場を見た事実を誰にも言わないと血で誓約書を書くけれど、後にトムは恐怖に戦くばかりか真犯人を知ることくだけで良心の呵責にも苛まれる件は、作者の特徴を表していると言ってよいだろう。そのように良心の呵責に悩む作者の心理が多くの作品で垣間見られることが多いからである。トムの日中の日々は輝きと歓喜に満ちているが、反対に夜は戦慄を覚えずにはいられないのである。

本作品の最後の筋としては、トムとハックとが宝探しに行き一攫千金に成功するということだ。インジャン・ジョーは洞窟内で死んでしまうという結末がつけられる。金貨を手に入れたトムとハックは脚光を浴びることになるが、ここで大衆としての村人たちが語り手によって風刺される。大勢の村人たちは気まぐれで、道理をわきまえない存在である。たとえばインジャン・ジョーをリンチにしたいと強く思いながら彼があまりにも手に負えない恐るべき悪漢であるため率先して実行する人も出てこないばかりか、墓をあばいて死体を盗むという犯罪を犯していることも分かっているが裁判に訴えることもないのである。また、インジャン・ジョーは5人の殺人を犯しているながら、村人たちは彼の赦免として知事に対して嘆願書を出したりする。世間は気まぐれなのである。原語では大衆の特徴は次のように表現される。それはトムとハックが宝を発見したあとの一般大衆の欲望のことである。

THE READER may rest satisfied that Tom's and Huck's windfall made a mighty stir in the poor village of St. Petersburg. So vast a sum, all in actual cash, seemed next to impossible. It was talked about, gloated over, glorified, until the treason of many of the

citizens tottered under the strain of the unhealthy excitement. Every "haunted" house in St. Petersburg and the neighboring villages dissected, plank by plank, and its foundation not by boys, but men—pretty grave, unromantic men, too, some of them. Wherever Tom and Huck appeared they were courted, admired, stared at.

以上のように、アメリカ文学における優れた作品の一例として『トム・ソーヤーの冒険』についてストーリーから考察した。そして、それを原語で読む楽しさを強調したのだ。味わい方および学習方法として、繰り返せば、物語を原語で音読し、それを読解に役立ててもらいたい。原語を翻訳してしまうとニュアンスが微妙に異なってしまうところが少なくないため、心を決めて書き言葉としての英語に触れて欲しいのである。

4. 結び

マーク・トウェインがアメリカ文学の金字塔を立てて以来、20世紀になってから確立されたアメリカ文学は、今や世界中に多大な影響を及ぼしていると言っても過言ではない。無論マーク・トウェイン以外にもアメリカ文学において魅力的な作品を残している作家は枚挙にいとまがない。学生は、最初はたとえ小説でなくともより容易に読める短編から入って小説へと移行してもよいだろう。小説はわれわれの心を少なからず満たしてくれる。困難なことであっても継続して力を尽くせば必ず道は開けるものである。最終的には翻訳に頼らず、直接原書で読む楽しさを実感できるようになれば、筆者としては望外の喜びである。